

# 「金・銀・銅サミット」の先を見すえて

文——伊東孝 Takashi Itoh ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授

写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ● 土木写真家

昨年十月六〜八日の三日間、新居浜で産業考古学会の全国大会が開催された。産業考古学会といっても、聞きなれない人が多いにちがいない。しかし土木・建築をふくむ産業遺産の保存に関して、わが国では最も古い学会で、一九七七年に創立されている。産業遺産の保存に関する国際組織では、TICCIH（国際産業遺産保存委員会、先月号参照）が有名だが、TICCIHの創立が一九七八年だからそれより一年早く設立されている。こう書くといかにも先駆的な学会といえるが、種をあかせばイギリス産業考古学会が一九七三年に創立され、同年、産業革命発祥地のひとつで、世界最初で最古の鉄の橋のあるアイアン・ブリッジ峡谷において、第一回産業記念物保存国際会議が開催された。この発展形としてTICCIHが生まれた。産業考古学会は、第一回の国際会議に参加された人たちが、日本でも同様な課題があるとして設立し

た学会である。発想の原点は海外にあるが、土木・建築分野をふくめ保存をメインとする学会としては、わが国最初である。産業考古学会は、TICCIHの日本支部を兼ねている。

世界文化遺産を評価するICOMOSは、産業遺産の評価に際してはTICCIHに意見を聴取することになっている（先月号）。TICCIH自体、わが国では馴染みがないが、昨年の十一月、アジアではじめてのTICCIH国際会議が十一月四〜八日の五日間の日程で台湾で開催された（会議後の見学日程をふくめると全八日間）。アジアの国際会議なので、産業考古学会の会長を拝命している筆者も、基調講演の榮に浴することができた（他には主催国の台湾、会長のアメリカ、産業考古学提唱国のイギリスの各講演者）。

わが国の産業考古学会は、設立されてから三五年にもなるのに、いままで一度も新居浜で全国大会を開催することがなかった。なぜかといえ、全国大会は地元の協力があってはじめて開催できるのだが、いままで体制が整わなかった。しかし新居浜は日本三大銅山の一つとして知られ、近代の産業遺産が、数多くしかも大規模に残っていることで有名である。新居浜大会は会員の長年の夢であった。昨年からは会長を拝命した筆者は、愛媛には二〇年以上前から縁があるので、一肌脱ぐことになった。一〇年前には『愛媛温故紀行』（財えひめ地域政策研究センター）にも関わったことがある。



東平の索道場(索道基地と選鉱場・貯鉱庫)跡

物資輸送の中継基地で、下部鉄道の黒石駅まで鉱石が搬送された。1905(明治38)年竣工。1916(大正5)年、旧別子にあった採鉱本部が移転し、東平は鉱山町となる。煉瓦は索道の基礎跡。



端出場水力発電所

送水鉄管は、右側の斜面沿いに配置され、発電所内の水車を回して発電した。有効落差560.61mは、当時東洋一といわれ、出力3,000kWもわが国最大級であった。1912(明治45)年竣工。登録有形文化財。



同発電所内部

右側の水車(手前)と発電機(奥)が建設当初からのもので2号機。水車は1910年、独フォイト社製、発電機は1,500kW・1909年、独ジーメンス・シュッケルト社製。天井のクレーンも当初からのもの。





### 「煙突山」の煉瓦煙突

煙突を囲む小さな広場も、地元の市民団体が自主的に維持管理している。市は、住友グループ企業と土地を交換して、煙突周辺を市有地としてまとめた形で保存し、倒壊防止のため煙突内にはコンクリートを充填した。登録有形文化財。



江戸時代の一六九二(元禄四)年に開坑した別子銅山は、一九七三(昭和四十八)年に閉山するまでの約二八〇年間に七〇万トンの銅を産出した。開坑した七、八年後には、世界一といわれる年間一、五〇〇トンを超える産出量を誇ったが、それも長くは続かなかった。それでも江戸時代を通じて、年産三〇〇ト以上の産銅量を保持して長崎貿易を支え、東アジアの貨幣経済に貢献した。鑿と槌と玄翁による手掘りに代わって登場し

た近代技術は、疲弊していた銅山を再生させた。火薬やダイナマイトの輸入、削岩機、巻揚機、コンプレッサー、蒸気機関、電気、電車など、近代の技術と最新式の機械が年を追うごとに導入された。中でも採鉱に関わる最初の火薬の導入が一番ありがたかったという。一カ年の産銅額が、旧幕時代の優に百年分に匹敵するともいわれた。明治後期の四十年代には、産銅量が六、〇〇〇ト台を記録している。元禄期の四倍である。

別子銅山の遺産群は、種類や時代・地域の多様さ・広さにおいて、わが国随一といえる。遺産の分布は、赤石山系の山中から、麓の端出<sup>はで</sup>場・山根地区、海岸部の星越<sup>ほしご</sup>・惣開<sup>そうかい</sup>・新居浜港、さらには沖合の四阪島(今治市に属する)にまで及ぶ。時代的には、江戸期から、明治・大正・昭和期の繁栄と閉山までの変遷を示す一連の遺構が現存する。

江戸期の遺構は旧別子を中心に、寺院跡、番所跡と石垣、蘭塔場(一六九四年におきた別子大火災の犠牲者の霊を奉った墓所)跡、坑口跡、坑道内には江戸期の採掘鉞法である「犬下り掘」(鉞床を斜めに掘進する採掘法)跡や「二三の銀切」(坑内の大きさが幅二尺・高さ三尺)跡などが残る。

今回現地でわかったのは、地元の人たちが遺産の保護活動に関わりはじめていたことだった。写真に掲載した煉瓦煙突は、国嶺川の出口、山根の生子山<sup>しょうじやま</sup>の頂きに立っている。地元では、「煙



### 山根グラウンド観覧席と大山積神社

若き鉱夫たちのボランティアでつくられた。きれいに整えられた石積みは、とても素人によるとは思えない。しかし植林で埋もれた山の斜面に築かれた壮大な石積み群を思えば、当時の鉱夫たちの技量もうなづける。登録有形文化財。

突山」と愛唱する。かつて山の麓には、精錬所(明治二十一年竣工)があったが、昭和三年、同地に大山積神社が旧別子から遷座され、あわせて若き鉱夫たちのボランティア活動によって石積みの観客席をもつ山根グラウンドが整備された。煙突をまちづくり<sup>まちづくり</sup>に生かそうと、地元の市民団体が山肌を整えて登山道を整備し、里山として管理している。登山道の処どころには、ベンチや案内板、急な階段や坂道には手すりが設けられ、いづれも地元の人たちの手によるものであった。そんなに高い山ではないので、朝の散歩がてらに頂上まで登る人が多いという。取材中にも山から下りてくる老夫婦にお会いした。

地元の高校生たちの活動も盛んである。県立新居浜南高校の生徒は、まち学習として別子銅山の近代化遺産の調査・研究を一九九九(平成十一)年からおこない、ビデオやガイドブックの制作、体験者の話を取材した「語り部アーカイブ」活動、それらの成果をインターネット上で情報発信している。「マイタウンマップ・コンクール」で受賞したり、二〇一〇年には活動が認められて、ユネスコスクールに認定された。わたしもはじめて知ったのだが、ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的な試みを比較研究し、その調整をはかる共同体として一九五三年に発足したものだ。

さて新居浜の別子銅山は、暫定世界遺産リス



遠登志橋<sup>おとじ</sup>銅アーチ橋(下)と吊橋(上)、二つの橋がかかる。アーチ橋を保存するために吊橋が架けられた。縁を切られていることが写真からわかる。めずらしい橋名は、地名の「落シ」を嫌って、当て字にした。一九〇五(明治三十八)年竣工。登録有形文化財。

トには掲載されていない。どうなっているのだろうか。二〇〇六(平成十八)年、石見銀山遺跡のある島根県の大田市で、新居浜市長、佐渡市長が参加して「金・銀・銅サミット」が開催された。翌年、第二回が佐渡市で開催され、同年、石見銀山遺跡は世界遺産に登録されている。二〇〇八年には第三回の「金・銀・銅サミット」が新居浜市で開催された。新居浜市当局の姿勢はわかった。施設や土地を所有している住友グループとの調整に時間をとられているのかも知れない。オリンピックのメダルではないが、金・銀・銅の世界遺産登録プロジェクトには夢がある。

### 参考文献

・「別子開坑二百五十年史話」(株)住友本社、昭和十六年